2019年11月、ALSの患者さん（当時51）に依頼され、患者さんの自宅マンションで致死量の薬物を投与して殺害した疑いで、2名の医師が2020年7月に嘱託殺人容疑で逮捕された。医師の一人は手塚治虫の漫画ブラックジャックにでてくる、安楽死を金で請け負うドクター・キリコになりたいといい、その理由として「世の中のニーズってそっちなんじゃないのかなあ」とツィートで述べているようだ。彼らの言う世の中のニーズとは何か、かれらの著書の中に、認知症などで家族の介護を受ける高齢者を引き合いに出し、「証拠を残さず消せる方法がある」と恐ろしいことを述べている。今回は神経難病の方の安楽死の問題とされるが、かれらに優性思想があるのは間違いない。この医師達が特殊だといって済ませられるだろうか。この事件を巡ってはSNS上で「患者に選択肢を認めるべき」「生きる権利があるなら死ぬ権利があってしかるべき」などと賛同する投稿も散見される。患者さんは胃ろうをしていたが主治医に胃ろうからの栄養の差し控えを訴えたが、主治医は他の医師などと相談しその要求を受け入れなかった。患者さんには30人ほどの多職種が関わり、外出援助やコンサート活動などをしていたようだ。我々医療者はどう考えていったらいいのだろうか。
　石川県保険医協会の社会保障セミナー第2回は「『患者と人権』かけがえのないいのちを語る〜ＡＬＳという病が課した人類への課題〜」というテーマだった。当時日本ＡＬＳ協会の会長であった橋本操さんに来ていただいた。橋本さんは人工呼吸器、経鼻胃管栄養の状態で吸痰も常時必要だった。文字盤を目で追いながらの講演だったが、「日本は『赤信号みんなで渡れば怖くない』的な国ではないかと思うのです。まして尊厳が手軽に手に入るのならば、ユーも尊厳死しちゃいなよ、ふうな話になっても不思議ではありません。一見心細げながら実は逞しい生命がある限り、守っていくことは社会の責務だ」と述べた。社会保障セミナーの講師の井上英夫さんは、「尊厳とは人権である」「自己決定といっても、現実には選択肢のないところで自己決定が行われている」ことなどを話された。

医療者は人権保障の担い手であるとセミナーを通して学んできたが、様々な人権侵害の考えや優性思想にしっかりとした分析と反論をしながら立ち向かっていかなければならない。